

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける No.31

「秋の実の音楽隊 Band of autumn fruits」

2020年11月12日

立冬(11/7)が過ぎ、秋が深まってきた。木々は命のサイクルの最終段階で実を付け、冬支度をしながら、次の世代に命を引き継ぐ営みをしているようだ。

地面にはいろいろな“どんぐり”(堅い皮をつけた実の総称)が落ちている。先号で食用の実をいくつか挙げたが、カシヤクヌギの実は独楽や人形作りの材料として拾い集めた事が懐かしい。松ぼっくりは、松の実が弾けた後の殻だが、よく見ると、その美しい形状に感動する。ところで、堅い実のクイズ3題にすぐに答えられますか?(②は超難問)。

やはり赤い実には目が向き、いろいろと想像が湧いてくる。**イイギリ**は、高い木の枝にぶどう房のようにたくさんの実をつけるクリスマスツリーのような樹木だ。**ソヨゴ(冬青)**はその名のとおり、真冬でも緑の葉、赤い実が凛としている。**サネカズラ(実葛)**は芦花公園の知られざる名物で、春に咲いた白い花が5ヶ月余かけて実を結び、赤い粒で囲まれたかんざし(簪)を思わせる実に成長する。**サンゴジュ**は、陸の赤珊瑚のようだ。**モチノキ**からは、緑の葉と真っ赤な実から自信と強い個性が伝わってくる。しかし、**ピラカンサ**からは(赤い小鳥も食べに出来ない)どうしてか何も想像が湧き出て来ない(ゴメン)。

榎の木の実はユニークだ。2連ダンゴの様な実を他では見たことがない。**モッコク**は代表的な庭木で、実は野鳥が食べる、という。花の香りがセッコク蘭に似ていることから命名された。**カンレンボク**の中心から球状に伸びた実は、花と見違える。英名は Happy tree。ブローチに使いそう。地面に落ちた**紅葉葉フウ(楓)**は、小さなハリネズミが群がっているように見える。銀スプレーを吹き付けると立派な飾り物となる。**アオギリの実**は一粒の種を乗せた小舟のようで、一度見たら忘れない。写真は枯れた実の群れが落ちずにいる姿。**カタルパ**は、新島襄が100数年前に徳富蘇峰・蘆花兄弟にアメリカカミヤゲとして贈った若木の孫木。インゲンのように細長いササゲ(大角豆)が垂れ下がっている。**ヤマイモ**の実(天狗の鼻)を見つけた時には、鼻筋に付けて遊んだ子ども時代を思い出した。

シマトリネコの名が分かるまでネット検索を繰り返した。結局、短冊のような実をつける木と入力した時にヒットした。シマ=沖縄原産で暑さに強く寒さに弱い、庭木として人気がある、という(実際、近隣の庭木として目にした)。**サルスベリ(百日紅)**は、夏中花を咲かせた後、立派な実をつける。地球温暖化に耐え抜く木の一つになりそう。

ノシランは草の実の一つで、今は黒に近い色だが、これから竜の目のような深い青色に変化する。**洋種(アメリカ原産)ヤマゴボウ**も子どもの頃の遊び材料で、ぶどうのような濃い赤紫色の汁をインクとして絵を描いていた。しかし、服に付くと色が抜けず、後悔した。

秋の実は実に多種多様で、色・形・香・味にそれぞれ特徴があり、食用であれば秋の味覚として、どんぐりであれば子ども時代、自然の中の遊んだ思い出を残す。そこから私は、吹奏楽の楽器が奏で心に響く音楽隊をイメージさせられた。